

(2) 予察情報－2 特殊報

平成30年7月17日

平成30年度 病害虫発生予察 特殊報 第1号

病害虫名： クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii*

対 象： ウメ

1. 病害虫情報の内容

クビアカツヤカミキリの発生と被害を、東京都多摩地域のウメにおいて初めて確認した。

2. 発生経過

- (1) 平成30年7月に東京都多摩地域の生産園内のウメにおいて、カミキリムシ科の成虫の発生と、枝及び樹幹には虫孔(成虫の脱出孔)や多量のフラス(幼虫の糞と木くず)の排出を確認した(図1、図2、図3)。成虫の形態的特徴から、クビアカツヤカミキリ(*Aromia bungii*)と同定した。
- (2) 本種は平成25年に愛知県、平成27年に徳島県、平成28年に大阪府、平成29年に栃木県、群馬県及び埼玉県で特殊報が発表されている。都内でも平成27年に河川沿いのサクラで初めて発生が認められ警戒中であった。

3. 形態

成虫は体長28～37mm。通常、前胸背板を除き光沢のある黒色を呈する。前胸背板は明赤色だが、個体により黒色となる(黒色個体はわが国未報告)。触角と脚部は暗青灰色。前胸背板には4つの小突起を備え、両側部の突起は側方に突出し目立つ。

4. 生態

樹木内部で蛹から羽化した成虫が6月上旬から8月上旬に出現し、交尾・産卵する。産卵は幹や樹皮の割れ目に行い、8～9日後には卵が孵化し、幼虫が樹木内部に食入する。幼虫期間は2～3年、春～初夏の摂食が盛んであり、この時期にフラスが多く見られる。

5. 被害

幼虫が樹木に寄生し、幹や枝の内部を食い荒らし、時に枯死させる。
海外での報告では、サクラ、カキ、ウメ、モモ、スモモ、ザクロ、オリーブ、ヤナギ、コナラ等多くの樹種に寄生するといわれている。

6. 防除対策および注意

- (1) 羽化した成虫の分散防止及び新たな産卵防止のため、樹幹部にネット(容易に切れない目開き4mm以下のもの)等を巻き付ける。この際、幹とネット等の間が密着していると、幼虫や成虫が食い破るため、幹に密着させないように巻く。
- (2) 定期的に園内を見回り、ネット内の成虫はハンマー等で速やかに撲殺し、ネットの外の成虫は捕殺する。捕殺する際は、刺激臭を放つ場合があるので注意する。また、成虫を防除対象とした薬剤を使用する。
- (3) フラスが排出される幼虫食入孔を見つけた場合は、針金等で刺殺するか、幼虫を防除対象とした薬剤を使用する。なお、現在の登録農薬は以下のとおりで、成虫に対しては1剤のみである。不明な点があれば病害虫防除所や普及センターに連絡する。

○幼虫を防除対象とした薬剤

薬剤名 (成分名)	適用作物名	適用病害虫	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フェンプロパトリンを 含む農薬の使用回数
ロビンフッド (フェンプロパトリン)	うめ	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	5回以内(但し、噴射は2回以内、散布は3回以内)
	果樹類*	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	2回以内
ベニカカミキリムシ エアゾール (フェンプロパトリン)	うめ	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	5回以内(但し、噴射は2回以内、散布は3回以内)
	果樹類*	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	2回以内

*かんきつ、りんご、なし、びわ、もも、うめ、おうとう、ぶどう、かき、マンゴー、いちよう(種子)、くり、ペカン、アーモンド、くるみ、食用つばき(種子)を除く

○成虫を防除対象とした薬剤

薬剤名	適用作物名	適用病害虫	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
バイオリサカミキリ	果樹類	カミキリムシ類	1樹当たり1本	成虫発生初期	—	地際に近い主幹の分枝部分等に架ける

7. 参考文献

愛知県(平成 25 年)、徳島県(平成 27 年)、大阪府(平成 28 年)、栃木県、群馬県及び埼玉県(平成 29 年) 特殊報



図1 クビアカツヤカミキリ成虫



図2 排出されたフラス(幼虫の糞と木くず)



図3 株元に排出されたフラス

平成 30 年度 病虫害発生予察 特殊報 第 2 号

病虫害名： トビイロシワアリ *Tetramorium tsushimae* Emery

対 象： キャベツ

1. 病虫害情報の内容

トビイロシワアリの発生と被害を、東京都多摩地域のキャベツにおいて確認した。

2. 発生経過

(3) 平成 30 年9月に東京都多摩地域において、定植したキャベツ苗が萎凋、枯死する被害が発生した(図1)。被害株の地際部にアリの寄生、食害及び営巣を確認した(図2、3)。

採取したアリの同定を横浜植物防疫所に依頼した結果、トビイロシワアリ(*Tetramorium tsushimae*)と確認された。

(4) 本種は屋久島以北の日本各地に分布し、西南日本では最も普通に見られる種のひとつである。農作物の被害は、平成10年の福岡県を始めとし、千葉県、広島県、香川県、佐賀県、長崎県、山口県、滋賀県、群馬県、茨城県、静岡県、埼玉県、長野県及び新潟県の 14 県から報告があり、キャベツ、ブロッコリー、ハクサイ、パレイショ、ナス、カンキツ及びアスター等で被害が確認されている。

3. 形態

働きアリの体長は約 2.5 mm、体色は褐色から黒褐色で、頭部及び胸部の表面は縦じわに覆われる(図4)。

4. 生態

本種は雑食性で、昆虫などの死体、雑草の子実や発芽直後の芽、植物の甘露、樹液などを食べる。

比較的乾燥した場所を好み、日当たりの良い裸地や草地等で、草の根元、石の下や腐朽木中に巣を作る。巣の規模は大きく、1つの巣に多数の女王アリを有する。

5. 被害

株元に土を盛ったり、地際の茎や根の表皮を加害してくぼんだ加害痕を形成し、株全体を弱らせる。被害の激しい株は枯死する場合もある。

6. 防除対策

本種に対する登録薬剤はないため、深耕やかん水による巣の破壊等の物理的・耕種的な防除に努める(平成 30 年 11 月 6 日現在)。

7. 参考文献

特殊報及び技術情報:福岡県(平成 10 年)、千葉県(平成 19 年)、広島県(平成 21 年)、香川県(平成 22 年)、佐賀県(平成 22 年)、長崎県(平成 22 年)、滋賀県(平成 23 年)、山口県(平成 23 年)、群馬県(平成 26 年)、茨城県(平成 28 年)、静岡県(平成 29 年)、埼玉県(平成 30 年)、長野県(平成 30 年)及び新潟県(平成 30 年)



図1 被害ほ場の様子 (キャベツ)



図2 被害株の地際部 (赤キャベツ)



図3 集団での加害の様子 (赤キャベツ)



図4 トビイロシワアリ成虫 (働きアリ)